Background information / pictures available online at:
www.toy-worlds-museum-basle.ch
Media, password: swmb

参考資料/写真は以下のサイトでご覧になれます：
www.toy-worlds-museum-basle.ch
メディア、パスワード: swmb

Private Marilyn - the person behind the concept of Monroe
A unique special exhibition
19th October 2013 - 6 April 2014

プライベートのマリリン・・モンローという名前の裏側で
ユニークな特別展示
2013 年 10 月 19 日 – 2014 年 4 月 6 日

今回の特別展示では、人々から忘れがたく、そして類まれな女優と言われるマリリン・モンローの思い出の品やプライベートの品々700 点以上がスイスで初めて公開されます。艶やかなハリウッドスターとして知られ、死後数十年を経た今でも世の中の注目を集めるマリリン・モンロー、そんな彼女の真の姿をご紹介します。

テッド・スタンファーのコレクションは、ヨーロッパにおけるマリリン・モンローのプライベートコレクションでは最大数を誇ります。個人で所有するコレクションを一般に公開するコレクターは数少ないのですが、マリリン・モンロー大家であるテッド・スタンファーはその一人です。展示会では、個性溢れ、飛び抜けた存在感を歴史に残した天才女優に敬意を示すのはもちろんですが、今回は、マリリン・モンローを一人の人間として、私的な部分、そして有名でない彼女の一面もご紹介します。しばしばセックスアピールの象徴として挙げられますが、その外見の裏側に隠された姿は、しっかりと目的を定めた知的なビジネスウーマンでありました。名声に左右されることなく、常に普通の女性として存在していたのです。

マリリン・モンローは 1926 年 6 月 1 日、ロサンゼルスでノーマ・ジーン・モーテンセンとして生まれ、ノーマ・ジーン・ベイカーという洗礼名を与えられました。そして、養家をあちこち回って育てられました。モデルとして成功を収めた後、1946 年に最初の映画出演契約を結び、1950 年代にはハリウッドの大女優となりました。しかし、1962 年 8 月 5 日、睡眠薬を過剰に摂取したため亡くなりました。彼女の死は、果たして事故であったのか、自殺か、殺人であったのか今でもはっきりしていません。

死後５０年を経た今でも、マリリン・モンローは世界中であらゆる世代の人々にオーラを放ち続けています。彼女に関する書籍も６００冊以上に上ります。有名な物理学者、スティーブン・ホーキング氏(1942 年～)もマリリン・モンローのポスターをケンブリッジ大学の研究室に飾っているそうです。それについて訪ねられると「別の時空でマリリン・モンローと結婚したい」と答えたそうです。

死後、世の中にこれほどまでに存在感を残す人はあまりいないでしょう。この女性の魅力とは一体何なのでしょうか？映画の中でのカリスマ性？役になり切ったずば抜けた才能？謎に包まれた死？たぶんこれら全てがあてはまるのではないでしょうか。ミュージシャンや芸術家にも影響を与えました。エルトン・ジョンの『キャンドル・イン・ザ・ウィンド』という曲はマリリン・モンローへ捧げられ、その後１９９７年にリメイク版がダイアナ元英皇太子妃への追悼曲となりました。この二人の女性はともに３６歳で亡くなっています。

アンディ・ウォーホルの『マリリンディプティク』も世界的に有名です。１９６２年彼女の死後に作製されたスクリーンプリントです。１９５３年に映画『ナイアガラ』のためにジーン・コーマンの撮影したスチール写真をもとに作製されました。ウォーホルはマリリン・モンローの死のわずか２，３日後にスチール写真を手に入れたそうです。

マリリン・モンローは同世代に言われていたような“頭の鈍いブロンド娘”ではありませんでした。彼女の IQ は 168 以上だったと言われています。（100 が普通で 150 以上は天才と言われている）

同世代のノーマン・メイラー、トルーマン・カポーティ、そして彼女の３番目の夫、アーサー・ミラーなどはマリリン・モンローの知識の高さ、そして知的興味心が非常に高かったことも知っていました。読書を楽しみ、彼女の書斎には、４００冊をほどの歴史、芸術、哲学、心理学、詩の本、そしてアルバート・カミュ、ジェームス・ジョイス、トーマス・マン、ジェームス・サーバーと言った作家の本もありました。お気に入りの作家は、ウォルト・ホイットマンとジョン・キーツでした。詩を書くことも好きで、この展示会では彼女のいくつかの短い詩を紹介しています。マリリンは繊細で傷つきやすい女性でしたが、一生懸命に自立しようとしながら他の人に頼ってしまうという複雑なタイプでもありました。完全主義者で野心的な面もありました。自信の顔の右側が”一番良く見える”という自分の意見を持っていました。メガネが必要でしたが、スタジオの要望でこのことは公表されていませんでした。吃音症を患っていたことも隠されていました。もちろんスタジオにコーチが付いて、一緒に矯正していました。

シャンペンを好み、特に１９５３年のドン・ペリニヨンが大好きでした。好きな香水はシャネルの５番でした。食べ物の好みはいたってシンプルで、ハンバーガー、ステーキとベイクドポテト、ラムチョップが大好きでした。ジョー・ディマジオと出会ってからはパスタも好きになったそうです。美容に関しても大変シンプルで、デビュー当時は１日に１５回顔を洗い、ニベアクリームを使っていた

と伝えられています。後に、ニューヨークのアーノラスズロ社という有名人や金持ち用の高価な化粧品会社の宣伝をしていました。

ご来場の方には、それぞれの展示に関する面白くユニークな情報を収めたパンフレットをお渡しします。

映画『七年目の浮気』で、地下鉄の通気口に立って白いドレスがふわりと浮き上がる有名シーンのマリリン・モンローを大きなスクリーンで実物大でご覧ください。このシーンはマンハッタンのレキシントン通りと５２番街の角で、正確には１９５４年9月１５日水曜日の夜１時に撮影されました。その時間なら見物人は誰もいないだろうと予測されたのですが、実際は５０００人ものファンが集まり、マリリンの演技の度に拍手をしたり、声援を送ったりしました。撮影は何度も繰り返され、夫のディマジオはあまりにも寛容なシーンに怒りを増すばかりでした。このことと二人の間の数々の衝突により、二人は別れることとなりました。

騒音のためにこの短いシーンは使用することができず、ビリー・ワイルダー監督はスタジオでこのシーンを撮り直すことを決めました。４０回繰り返した後、ついに撮影は完了しました。

『お熱いのがお好き』の完全版を展示会においてご覧になることもできます。ビリー・ワイルダー監督の作品は常に最高のコメディーと評されています。１９５９年にマリリン・モンロー、トニー・カーティス、ジャック・レモンらの出演で製作されました。この映画の中でマリリンの歌った『I Wanna Be Loved by You』も非常に有名です。

コレクションのオーナー、テッド・スタンファーより

「マリリン・モンローに関する書物は山ほどあります。そしてこれからもまだまだ出版されることでしょう。真実を求めて彼女の半生記やレポートも数え切れないほど書かれました。そして彼女のイメージは今でも消えることはありません。でもそれがまた、ますます私たちを困惑させるのです。どれが真実で、どれが作り話なのだろうか？」

いったい何が真実なのか、誰にも彼女に関して確かなことを断言することはできないでしょう。しかし、マリリンの映画や写真、そして彼女の個人的な持ち物や道具などは確実に残されたのです。１９６２年から４０年もの間、それら全ては梱包され、誰にも触れることができないように、まるでタイムカプセルのように保管されてきました。そして１９９０年代終わりに、彼女の持ち物などがオークションにかけられるようになって、彼女の生活をかいま見ることができるようになりました。今やっと、マリリン・モンローに近づき、彼女の真の姿、つまり残された真実に近づくことが許されたのです。

ノーマ・ジーン・ベイカー（１９２６－１９４３）

ノーマ・ジーン・モーテンセン（出生届の名前）は、１９２６年6月１日ロサンゼルスの総合病院で生まれました。後のマリリン・モンロー（芸名）です。１９２６年１２月６日、祖母デラ・メイ・モンロー（旧姓）ホーガンによって教会でノーマ・ジーンの母親の最初の夫の姓を取ってノーマ・ジーン・ベイカーという洗礼名が付けられました。こうすることによって私生児であることを隠そうとしたのです。

映画製作会社で働いていた母親、グラディス・パール・ベイカー（旧姓）モンローにとって、ノーマ・ジーン・ベイカーは望まれた赤ん坊ではありませんでした。母親の監督者であったチャールズ・スタンリイー・ギフォードがたぶん父親であろうと言われています。愛人の妊娠を知って、ギフォードは去っていったのです。マリリン・モンローは彼が父親であると確信していましたが、ギフォードがそれを認めることはありませんでした。

ノーマ・ジーンが生まれた当時、母親は宣教師であり説教者のマーティン・エドワード・モーテンセンと結婚していましたが、別々に暮らしていました。初めの結婚相手ジョン・ベイカーとの間に２人の子供がありました。ノーマ・ジーンにとって父親の異なる兄と姉、ロバートとバーニースは両親の離婚以来、父親の元で暮らしていました。

ワーキングマザーの母は、信心深いアルバート＆アイダ・ボレンダー・ウェイン夫妻の元へ食べるための少しのお金と引き換えに娘を養子に出しました。そこでノーマ・ジーンは最初の数年間を平穏に暮らしました。ボレンダー家は何人もの養子を育てていました。ノーマ・ジーンはたびたびやってくる赤毛の女の人が誰なのか知りませんでした。それが実の母、グラディスだったのです。ノーマが７歳のとき、近所の人がノーマの飼っていた犬のティッピを撃ってしまいました。繊細な年頃のノーマは悲しみから立ち直れず、ついに養父母は実の母の助けを求めました。その頃、母は小さな平屋の家を買えるくらいになっていたので、ノーマ・ジーンの世話もできるようになっていました。しかし、それから間もなく母、グラディスは祖父の自殺を経て、神経衰弱から精神を患うようになってしまいました。１９３４年、グラディスは病院に入院しました。

ノーマ・ジーンは政府の世話を受けることになりました。８歳からずっと養父母の家を転々としましたが、最終的に母親の親友であったグレース・マッキー（後に結婚してゴダード）に引き取られました。グレースは映画好きで、小さなノーマ・ジーンも一緒によく映画へ連れて行きました。それが映画への熱情に繋がったのでしょう。１９３５年初め、その養母が結婚し、ノーマ・ジーンはロサンゼルスの孤児院で２２ヶ月を過ごさなくてはなりませんでした。彼女の人生でこの期間が最も辛いときでした。１９３６年、グレースは後見人となり、再び少女を引き取りました。しかし、グレースは酔った夫の意地悪な態度を見て、１９３７年少女の遠い親戚に当たるアイダ・マーティンに少女をあげてしまいました。そこで、ノーマ・ジーンは13歳のいとこから性的虐待を受け、またしも別のところへ移ることになりました。１９３８年、比較的裕福で心の優しい未亡人、アナ・ロワーの家へ落ち

着きました。“アナおばさん”のもとで、ノーマ・ジーンはやっと心の支えと信頼を手にしたのです。後に、『アナは、私に愛とは何かを教えてくれた唯一の人です』と語っています。

ノーマ・ジーンは１９３９年に高校へ進学しました。ほとんどの教科で平均の成績でしたが、ジャーナリズムのクラスでは才能を発揮したようです。学校新聞にもユーモアのある記事を書いていました。特に、男性はブロンドが好きだという記事を書いていたのには注目すべきでしょう。非常に恥ずかしがり屋で、クラスメートと話すときにどもるようになってきました。13 歳の頃、長めのカールのかかったブルネットヘアヘアで美人のノーマ・ジーンは、学校の男の子たちの人気者でした。

アナ・ロワーが年老いて健康状態が悪くなると、ノーマ・ジーンは再びゴダード家へ移りました。エレノア“ベベ”ゴダードは、彼女と同じ年で二人は仲良しになりました。１９４２年、ドック・ゴダードは仕事を理由にグレースとエレノアの二人をウェストバージニアへ連れて行ってしまいました。しかしノーマ・ジーンは行くことが出来ませんでした。その頃、ノーマ・ジーンは近所に住む 5 歳上のジェームス（ジム）・ドハティーと仲良くしていました。養母のグレースはジムの母親とともに、若い二人の結婚を計画しました。未成年の結婚に関する法令にのっとり、ノーマ・ジーンは再び高校を辞めなくてはなりませんでした。これによって大学へ進学することもできませんでした。

女優そして偉大なアメリカのセックスシンボル

写真モデルとしてのスタート（１９４４－１９４７）

映画業界でマリリン・モンローは最も有名な女優の一人と言えるでしょう。アメリカのセックスシンボルとして彼女を超える女優はいないでしょう。１９４５年、写真のモデルとして発掘されたのが彼女のキャリアの始まりでした。

１９４４年、ノーマ・ジーン・ドハティーは、武器工場の組立部門で航空機に防火剤をスプレーする仕事をしていました。セルロイドコマンドスとして知られるファーストモーションピクチャーユニットの指揮官であったロナルド・レーガン（後の第４０代アメリカ大統領）が陸軍の写真家デビッド・コノバーに戦争のために工場で組立作業をする魅力的な女性の写真を撮るように命じました。そのような写真は既に『Rosie the Riveter』というタイトルで礼賛を浴びていました。

マリリンの最初の写真は１９４５年中頃、陸軍の雑誌『ヤンク、アーミーウィークリー』に掲載されました。写真を撮ったコノバーは、マリリンの可能性を見抜いていてハリウッドの『ブルーブック・モデルエージェンシー』に応募することを勧めました。エージェンシーは若い女性にモデルや映画の仕事を紹介していました。そこに残された記録には、ノーマ・ジーン：体重５３．５キロ、サイズ９１－６１－８６、服のサイズ３８、身長１６６ｃｍ、髪の色ダークブロンド（エージェンシーからカールして、ブリーチ、パーマをかける、歯並びを完璧にと勧めあり）、そして目の色はブルーと記されています。

マリリンはアドバイスに従い、雑誌モデルやファッションモデルとしてデビューするための本格的なトレーニングを終えました。エージェンシーのアドバイス通り、髪をブリーチし、ブルネットからブロンドヘアとなり、初めてシャンプーの宣伝に登場しました。モデルとして活躍している間に、ブロンドの色味も９回ほど変えて最終的なプラチナブロンドになりました。

アンドレ・ド・ディーンズという写真家がノーマ・ジーンをカリフォルニア、ネバダ、ワシントンへの撮影旅行へ連れ出しました。あっという間にエージェンシーの売れっ子モデルの一人となりました。１９４６年には全国版の雑誌の表紙を飾り、１９４７年からは世界中の雑誌の表紙に登場するようになりました。

映画女優としての始まり（１９４６－１９４７）

１９４６年7月１９日、マリリンは２０世紀フォックスで始めてのスクリーンテストを受けました。エージェンシーの後押しでタレントスカウトマンのベン・リオンのとの面接に臨むことが出来ました。そしてすぐに副社長と製作担当のダリル F.ザヌックから若手女優として６ヶ月の契約を許されたのです。仕事があっても無くても１週間に７５ドル支給されるという契約でした。契約はさらに６ヶ月更新され、週休も１２５ドルに上がりました。

ベン・リオンと一緒に芸名をマリリン・モンローとすることに決めました。Mが二つ重なる響きが彼女は気に入っていました。マリリン・ミラーというダンサーの名前と母親のモンローという名前の両方に由来しています。

マリリン・モンローの誕生です。でもジーン・モーテンセンという本名がマリリン・モンローに正式に変わったのは１９５６年２月２３日のことです。

マリリンは毎日スタジオへ通い、歌とダンスの勉強を出来る限りしました。１９４７年エキストラとして初めて『ショッキング・ミスピルグリム』というコメディーに使ってもらえました。スタジオでエキストラとして小さな役を二つもらったのです。映画はマリリンのキャリアの足しになった訳ではなく、またスタジオにとって何の収益にもなりませんでした。そして１年後に彼女の契約が更新されることはありませんでした。

１９４７年初め、スタジオは数人の若手俳優達を養成するために俳優研修所へ送りました。マリリンはそこで仕事を続けることができました。映画シーン、社会的また政治的課題、本格的な演技の勉強を重ねました。またニューヨークの経験を積んだステージ俳優と知り合うこともできました。

人気上昇と初めての主役（１９４８－１９５２）

１９４８年3月、フォックスの会長であるジョー・シェンクの仲介でマリリン・モンローはコロンビア映画と6ヶ月の契約を結びました。スタジオの上層部は彼女に髪をブリーチして角張った生え際を電気分解療法で取り除くことを強制しました。それと軽い出っ歯の矯正と歯の漂白もしなくてはなりませんでした。

その夏、ミュージカル映画『コーラスのレディたち』で大役を得ることができました。このＢ級映画で、彼女は歌も歌えることを示しました。新しいエージェント、ジョニー・ハイドとウィリアム・モリス・エージェンシーの有力な副社長は、マリリンに鼻の軟骨のでっぱりを早急に取り除くことを命じました。

マリリンの人気は上昇し、１９５０年エージェントのハイドはＢ級映画『彼女は二挺拳銃』にダンサーとシンガーとしての端役の仕事を与えました。ジョン・ヒューストン監督の『アスファルトジャングル』という映画にも出演し、これは彼女にとって初めての大手プロダクション映画での重要な役でした。アンジェラ・フィンレイという役柄で年上の不正弁護士の愛人の役を演じました。当時、そのような役が最も似合っていると思われていたのです。

１９５０年１０月、マリリンは２０世紀フォックスと７年契約を結びました。スターの道を目指す女優に課せられた重い契約ではありましたが、彼女は初めて定収入を得ることができました。どちらかと言うと弱めの演技にもかかわらず、彼女のスクリーンでの存在感は他のスタジオに気付かれない訳はありませんでした。会社はマリリンの売り込みに力を入れ、ついにRKO映画社に貸し出されることになりました。

撮影中に、マリリンに関するセックススキャンダルが世界中に広まりました。１９５３年、マリリン・モンローのヌード写真を使ったカレンダーが取り上げられたのです。その写真は１９４９年に、赤い砂の上で撮られたヌード写真でした。レポーターの質問に対し、マリリンのウィットに富んだ答えのお陰で走り出したばかりの彼女のキャリアは救われました。

２０世紀フォックスで今度は『ノックは無用』という映画で精神を患った乳母役で主役を演じました。マリリンの女優業において最も優れた役のひとつと言えるでしょう。真面目な役柄の依頼もあったのですが、スタジオではどちらかというと物を知らない、セクシーなブロンド役を与えられることが多かったのです。
彼女の美しさに加えて喜劇的な才能も賞賛され、大衆を楽しませたということで『フォトプレー賞』を与えられました。

女優としてのピーク（１９５３年から）
１９５３年、スリラー映画『ナイアガラ』でドラマチックでセクシーな役を演じ、一躍有名となりました。彼女のキャリアで最も重要な時であり、マリリン・モンローが世界的な女優となったのもこの

頃です。しかしながら、その後は決まって軽いコメディー映画の金髪で頭のからっぽな役ばかりが回ってきました。従って有名になり数多くの賞も受けたにもかかわらず、彼女は挑戦する気を失い、残りの人生を真剣に考えることも無くなってしまいました。

１９５３年のミュージカル映画『紳士は金髪がお好き』で、マリリンはかの有名な『Diamonds Are a Girl's Best Friend』 を歌いました。
シネマスコープ製作会社の初めての映画『百万長者と結婚する方法』では、ローレン・バコールとベティ・グレーブルと一緒に出演しました。

１９５３年１２月、マリリン・モンローは戦火を被った韓国へのコンサートツアーに参加する契約をしました。１９５４年２月、米軍の前で歌ったのです。短いツアーは大成功でした。２日間で１０箇所のイベントに出演、６万から１０万人の軍人の前で歌いました。凍るような天候にもかかわらず、薄いイブニングドレスで出演したため、ツアーの後、肺炎を起こしてしまいました。

１９５４年『帰らざる河』が上演されました。マリリンが主要な役を演じた唯一のクラシックウェスタン映画でした。１９５３年から１９５４年にかけて、モンローは２０世紀フォックスの一番の稼ぎ手でした。１９５３年、マリリンはＲＣＡレコードと契約を結びました。１９５０年の２０世紀フォックスとの契約とは異なり、映画『帰らざる河』と『ショーほど素敵な商売はない』より、映画のサウンドトラックとは別に歌声を彼女自身の名前でレコード化し、シングルとＥＰを世界的に売り出すことが許されました。

重要な役柄（１９５５－１９５８）
１９５４年の終わり、マリリン・モンローはニューヨークへ移りました。アクターズスタジオへ通い“メソッド演技方”を習いました。リー・ストラスバーグが演技指導につき、マリリンは、リーと彼の妻ポーラとの友情を築きました。

１９５３年、２０世紀フォックスとの間で話し合いがもたれました。モンローは、もっと重要な役柄を希望し、いくつかの脚本を却下してしまいした。１９５４年両者はお互いに譲り合い、『ショーほど素敵な商売はない』の熱演が認められ、ビリー・ワイルダー監督の『七年目の浮気』では、主役の座を得ることができました。大ヒットした作品のひとつで、ニューヨークの地下鉄通気口の上でスカートがふわりと持ち上がるシーンは忘れられない有名シーンとなりました。

１９５４年１２月の終わり、マリリン・モンローとミルトンＨ．グリーンはマリリン・モンロー・プロダクションという製作会社を立ち上げました。フォックススタジオには彼らにとって未来はないと判断したからです。会社はモンローが５１％、グリーンが４９％を所有しました。当時ハリウッドで契約を結んでいた女優の中で自身の製作会社を始めたのは彼女が３人目でした。マリリン・モンロー・プロダクションが契約違反で２０世紀フォックスを訴えるというスキャンダルが起きました。再

三の請求にもかかわらず２０世紀フォックスは『七年目の浮気』の出演料を支払わなかったのです。やっと和解にたどり着き、その後、彼女も支払いを受け取りました。両者承諾の上、７年契約は破棄、新たな契約を作成することができました。

同年、マリリンは契約条項にのっとり、脚本と監督を自分の希望を入れて選び『バス停留所』を撮影しました。マリリンはこの映画での役柄に充分納得していて、ゴールデン・グローブの最優秀女優賞にも初めてノミネートされました。
１９５６年の『バス停留所』に続き、ロンドンで『王子と踊り子』が撮影されました。マリリンの２６作目の映画で、彼女の映画会社が作った唯一の映画でした。マリリン・モンローと共演者ローレンス・オリビエ卿の演技方法は異なり、セットに強い緊張感を招きました。撮影の半ばに、精神分析医のマーガレット・ホーエンバーグ医師がロンドンまで駆けつけ、患者のマリリンを診なくてはなりませんでした。それでも予算オーバーすることもなくマリリンは彼女の演技で、国際的な二つの賞、David di Donatello (イタリア) と Étoile de Cristal (フランス)を受賞しました。この映画も、彼女が優れた演技力を発揮した一つと言われています。

『お熱いのがお好き』大ヒットしたコメディー（１９５９）
２年のブランクを経て、１９５８年マリリンはトニー・カーティスとジャック・レモンと競演、ビリー・ワイルダー監督のコメディー『お熱いのがお好き』で再びカメラの前に立ちました。この映画の中で最も有名となった『I Wanna Be Loved by You』を歌いました。展示会では、この映画の全編をご覧いただけます。

この頃、すでにマリリンがお酒と薬の影響を受けていたことに気付いた人もいました。いくつかのシーンは何度も撮り直しされました。彼女の完璧さや熱意だけがその原因ではなく、よく台詞を忘れたり、また何時間もセットに遅れて来たためだったのです。その結果、撮影は１８日間延長され、製作費もアップしました。当時の大ヒット作となり、今でも有名なクラシック作品です。コメディー映画の傑作と言われています。

キャラクターの役割と最後の映画（１９６１－１９６２）
素晴らしい声のマリリン・モンローがイヴ・モンタンと共演したにもかかわらず、不成功に終わった映画『恋をしましょう』の後、１９６１年、マリリンは彼女の最後の完成作『荒馬と女』の主演をつとめました。ジョン・ヒューストン監督の『荒馬と女』で、クラーク・ゲーブルとの共演でした。撮影中、脚本とキャラクターの役割が何度も修正されました。映画脚本家であり彼女の３番目の夫であったアーサー・ミラーがこの映画の脚本を手がけ、ロズリンの役はマリリンのために特別に書かれたものでした。しかし、その役はあまりにもマリリンそのものに似過ぎていたことと、またセットで他の問題も重なったために、アーサー・ミラーとの結婚は失敗に終わったのです。

彼女の最後の未完成映画『女房は生きていた』もコメディー映画でした。マリリンが続けざまに病気になったため、撮影はなかなか進みませんでした。１９６２年４月２３日の撮影初日も彼女は病気でした。３０日の撮影日のうち１７日しか顔を出すことはありませんでした。逆に撮影費用はかさむばかりで、映画『クレオパトラ』の費用も莫大に増えたこともあって、２０世紀フォックスの財政は破綻するところでした。５月の撮影中に、マリリンは伝説とまでなったマジソン・スクエア・ガーデンでのケネディ大統領の誕生パーティに出席、『ハッピーバースデーMr.プレジデント』を歌いました。

フォックスの許可なしに、それも病気休暇を取ってニューヨークへ行ってしまったマリリンは、会社から解雇されました。何年か後になって、ニューヨーク行きはスタジオの許可をもらっていたという書類が発見されました。７月の終わりに、スタジオの新しいマネージメントとの話し合いが行われ、マリリンにもっと良い条件で撮影が行われることが決まりました。しかし撮影が再開されることは二度とありませんでした。マリリンが死亡したからです。

マリリン・モンローの結婚

１９４２年６月１９日、マリリンの１６歳の誕生日の２週間半後に、子供の頃からの友だちであったジム・ドハティと結婚しました。マリリンの養母、グレース・マッキーとジムの母親によって結婚は決められたのです。マリリンはこれで孤児院や養父母のところへ戻る必要がなくなりました。しかし未成年の結婚に関する法律で、彼女はやっと通い始めたユニバーシティ高校を辞めなくてはなりませんでした。それによって大学進学もあきらめなくてはなりませんでした。

１９４３年の終わり、ジムは輸送船員としてアイスランドのカタリナへ送られました。１９４４年の春、太平洋任務となりました。ノーマ・ジーンが義母の家へ移り住むと、義母のエセル・ドハティは、彼女にラディオプレーン軍需工場の仕事を見つけました。
ジムの徴兵中に、ノーマ・ジーンは写真家のデビッド・コノバーと出会い、彼女のモデル業が始まりました。１９４５年のクリスマス時期、ジムが戦争から戻りましたが結婚は破局を迎えました。１９４６年９月１３日、ラスベガスでノーマ・ジーンとジム・ドハティは合意の上、離婚となりました

１９５４年１月１４日、マリリン・モンローは野球スターのジョー・ディマジオと結婚しましたが、その結婚はわずか９ヶ月しか続きませんでした。１９５２年にマリリンはブラインド・デートでディマジオと出会いました。映画『モンキー・ビジネス』撮影中に友だちの紹介で出会ったのですが、たぶん派手なネクタイをしてボディビルダーのような筋肉の男が現れるだろうと思っていた彼女は初めディマジオに会いたくないと言っていたそうです。有名人カップルの結婚はいつでも週刊誌に追いかけられるものです。現役野球を引退したディマジオは家に居てくれる主婦と結婚することを願っていました。しかしモンローの人気は絶頂期でした。マリリンは夫に慕われてはいても、つらい扱いを受けたと語っていました。ディマジオは自分の野球人生は終わったが、妻がスポットライトを浴び続けていることに耐えられなかったのでしょう。夫がずっとテレビを観ていることもマリリンにはつまらなかったのです。また『七年目の浮気』の撮影で地下鉄の通気口の上に立ち、マリリンのスカートが

何度もまくれ上がる有名なシーンを見に集まった聴衆にディマジオは嫉妬を感じたのです。１９５４年１０月３１日、二人はお互いの精神的苦痛を理由に別れました。

しかしながら１９６１年春ごろから、モンローとディマジオは再び熱い思いを抱き始め、有名デザイナーのジーン・ルイに白いドレスまで注文していたことから、もう一度結婚を考えていたのかもしれません。マリリンの死後２０年もの間、ディマジオは１週間に３度も彼女のお墓に赤いバラの花束を送っていました。

１９５６年6月２９日、マリリン・モンローと有名劇作家アーサー・ミラーはニューヨークで民事結婚をしました。夫のためにマリリン・モンローはユダヤ教を受け入れました。
二人は１９５１年に映画『素晴らしきや、定年！』の撮影で知り合いました。モンローはミラーに保護者そして父親の姿を重ねていたのです。ミラーの前妻との間の子供たちの世話もできるし、ついに家族を手に入れることができたのです。二人は大変幸せで、ミラーの愛情はモンローに安心感と承認を与えることができました。

カップルは子供も欲しがっていました。マリリンは彼のために主婦となることも望んでいたのです。しかし３度の流産が二人の結婚を曇らせました。１９５７年、夫が共産党シンパであると非難されたとき、マリリンは静かに彼を見守っていました。

ミラーは、映画『荒馬と女』の脚本を手がけました。彼の短編を基にしたものでしたが、妻のために特別に書いたものでした。困難な撮影は、二人の結婚の終結の始まりでもありました。ミラーは妻の薬の服用に絶望し、マリリンもまた、ミラーが悲しんでいながらも日記に“突飛で救いようのない子供っぽい女だ”と記したのを読んでしまいました。繰り返された夫婦間のいさかいの後、１９６１年１月２０日、二人は離婚しました。アーサー・ミラーがカントリーハウスを取り、マリリンはニューヨーク市内のアパートをもらいました。

モンローとケネディ家

ジョンＦ．ケネディーは大統領になる前からかなり気ままに浮気を繰り返していて、ホワイトハウスでもそれを隠さず続けていました。大統領の顧問チームがうまく一般には秘密が漏れないようにしていました。マスコミの一部はあえて大統領の悪い癖を公表しないようにしていました。人気の大統領だったからです。そして他の人たちもも国民の大好きな大統領には、目をつぶっていたのです。

１９６０年９月、民主党の指名大会での勝利を記念してロサンゼルスでのお祝いに有名人の一団を招きました。その中にマリリン・モンローも含まれていたのです。すぐ後に、将来の大統領が映画女優と一緒に夜遅く太平洋の海で裸で泳いでいたといううわさが広まりました。でも、当時マリリンはまだアーサー・ミラーと結婚していたし、ちょうど１９６０年の７月から１０月にかけてネバダ州で『荒馬と女』の撮影中でしたので、さすがにそのうわさは本当ではないようです。専門家のほとんど

は、二人が初めて会ったのは１９６１年１０月、ピーター・ローフォードの妻パトリシアが招待した時であったと言っています。

１９６１年１０月、ＪＦＫとマリリンはサンタモニカのパリセデスビーチロードにあるビーチハウスで出会いました。そこは、ケネディーの義理の弟でイギリス人俳優のピーター・ローフォードの家でした。そして１９６２年初め、二人はニューヨークでケネディーを祝うパーティで会いました。

１９６２年３月の終わり、二人はパームスプリングスの以前ビング・クロスビーが住んでいた家で会いました。その時、マリリンは大統領の誕生日祝いで歌を歌うと約束しました。大統領はあれほど挑発的なパフォーマンスになるとは思ってもいませんでした。
１９６２年５月１９日、ケネディー大統領の４５歳の誕生パーティーの席で、約１５，０００人の招待客を前に、マリリンは息だけの淫らな声でマイクに向かって『ハッピーバースデーＭｒ．プレジデント』と歌いました。彼女はジーン・ルイのデザインした２，５００個のラインストーンで飾られた派手な赤のドレスに身を包んでいました。ドレスは体の線がはっきりわかるほどピッタリしていました。まるで裸のようなドレスとそれに合わせた声の演出は、ケネディーと彼女の浮気のうわさをさらにあおることになりました。その忘れることの出来ないドレスは、何十年も後に 1,267,500 ドルという世界記録で売られ、２０１２年までは世界で一番高いドレスでした。２０１２年夏、『七年目の浮気』の地下鉄通気口で使われたさらに有名なプリーツのドレスは、オークションでなんと４６０万ドルにコミッションを足した額で売られました。

ケネディーはスキャンダルのうわさに困っていたはずです。彼はセックスの相手をシャツのように取り替えることができたのですから。マリリン・モンローは、「女を満足させられない男ほど、男らしさはセックスだと思ってうぬぼれていて、まるで賞金のもらえるスポーツをするように振る舞っているわ」と言っていたことがありました。

ケネディーの弟、代理法務大臣はマリリンに大統領との浮気は終わったのだと優しく伝えなくてはなりませんでした。しかし弟ロバートもマリリンに惚れていたことは誰もが知っていました。
１９６２年６月の終わり、ロバートはマリリンと話すためにブレントウッドへ向かいました。その後、二人は何度か会い、ケネディーの公務上の電話で何度も電話をしました。うわさには、さらなる弾みがつきました。

１９６３年の再選挙に備え、二人のケネディーは家族思いで忠実な夫というイメージを壊すのではないかと心配しました。モンローの死後、大統領は離婚しないのではないか、モンローに大統領との浮気のことを記者会見で公表すると脅されていたのではないか・・・というさまざまな憶測やうわさが飛び交いました。モンローは大統領との秘密を詳細に記した赤い日記帳のことを明かすべきでした。この日記帳の行方は今でもわかりません。ピーター・ローフォードとロバート・ケネディがマリリンの死の１日前に彼女を訪ねていることは確かなのです。そこで何が話し合われたかは誰も知りません。

分かっているのは、死の直前に彼女がケネディの義理の弟、ピーター・ローフォードにまた電話を掛けたということです。そして彼と彼の妻パトリシアから招待されていたその晩のディナーを断ってきました。

モンローとＦＢＩ

１９５５年８月、マリリン・モンローがソビエト大使館にビザの申請をすると、ＦＢＩの張り込みが始まりました。今ではＦＢＩのホームページでその情報を読むことができます。マリリン・モンローに関する書類は３１ページに及び、５０年以上も秘密にされてきました。
女優の死の少し前までの情報が記録されています。注目すべきは、記録が完全ではないということです。ＦＢＩによると、残りの部分は移動時に紛失したとのことです。

マリリン・モンローの死

マリリン・モンローは８月４日から５日にかけての深夜、薬中毒により死亡しました。検視官の報告によると「自殺の可能性もあり」とのことでした。検死解剖の結果および家政婦のユーニス・マーレイそして精神分析医のラルフ・グリーンソン医師の証言にも裏付けられています。解剖はトーマス・野口医師によって行われました。
初めはちっとも疑わしいことではありませんでした。１９５４年、彼女がジャーナリストのベン・ヘクトに口述した自叙伝で、「私にはとても特別なことでした。私は睡眠薬の空き箱を手に持って、ベッドルームで死んでいるのが発見されるタイプだということを自分で分かってます」語っていました。

マリリンの死亡以降、ずっと陰謀の説があったので、死因が明確になることはなかったのです。その夜、その現場にいた人々の証言は一致せず、何かを隠していることは確かでありました。まっさきに駆けつけた警官も自殺説には疑問を持っています。直接の死因は２種類の薬を服用したためといわれています。ペントバルビタール・ナンブタルという非常に強い睡眠薬と抱水クロラールというそれほど強くない睡眠薬の二つです。

近所の数人は、８月４日の夜１０時ごろ男が何人か訪ねてきたと報告しましたが、それが誰だったのかいまだに不明です。自殺だったのか、薬による殺人や事故だったのか確証することは不可能です。彼女が亡くなった当日のさまざまな矛盾が見られるにもかかわらず、マリリン・モンローは自殺の犠牲者としてお墓へ葬られたのです。

マリリンの死は、様々なうわさやマスコミのセンセーショナルな報道を引き起こしました。そして何十年もの間、多くの作家達の想像も膨らませました。何人かの人たちは、彼女が殺されるのを目撃したとトークショーや投稿で訴えました。１９８２年、司法制度によってマリリン・モンローの死亡を捜査する訴訟追行が再び行われました。目撃証言をしていた人たちは、誰一人として宣誓の上で証言することはありませんでした。そして捜査は終了となったのです。

ジョー・ディマジオはマリリンの死を知り、マリリンの姉バーニース・ミラクルとマネージャーのイネス・メルソンとともに葬儀の準備をしました。１９６２年８月８日、グリーンのプッシのドレスを着てブロンズの棺に横たわったマリリンは、家族と数人の友だちに見守られてロサンゼルスのウェストウッド・メモリアルパーク墓地に埋葬されました。映画業界の知り合いはジョーのリクエストで誰も参列することはできませんでした。恐らく、彼らは少なくとも彼女の死に責任があるだろうと思っていたからです。

ジョーにとってマリリンは人生をかけて愛した女性で、彼女の死を受け入れることはできませんでした。２０年もの間、マリリンのお墓の壁に赤いバラの花束を週に３回届け続けていました。１９９９年ジョーが８６歳で肺癌で亡くなったとき、彼は「やっとマリリンに会えるときが来た」という最後の言葉を残したそうです。

マリリン・モンローは典型的な自殺志願者だったのか？

マリリン・モンローが典型的な自殺志願者と思われる兆候はたくさんありました。死の３ヶ月前、ニューヨークのマジソン・スクエア・ガーデンで私たちにとって忘れることの出来ないパフォーマンスを見せたのもその一つです。
１９６２年５月１９日、ケネディー大統領の４５歳の誕生日を祝うパーティでした。１５，０００人の招待客の前で、マリリンはセクシーに吐息のような声で『ハッピーバースデーMr.プレジデント』を歌いました。

その頃、マリリンは復帰作となるジョージ・キューカー監督の『女房は生きていた』という映画に取り掛かっていました。相手役のディーン・マーティンも彼女が共演することを契約で確認済みでした。しかし仕事仲間の間では、彼女の体はボロボロで、薬なしでは足もふら付き、台詞も覚えられない状態だといううわさが広まっていました。キューカー監督は、１９６２年７月７日、休んでばかりいるマリリンを解雇しました。

しかし、１９８８年にハリウッドで２０世紀フォックスによって１７０のシネマファンのために古い記録が公開されたときに、このような判断は誤りであったことがわかりました。この公開の日まで、最後の未完成で終わったフィルムは１９６２年５月からずっと鍵をかけて保管されていたのです。フィルムの中のマリリン・モンローはまぶしく輝き、露に濡れていました。彼女の唯一のヌードシーンは、誰が見ても完璧なボディーで、完璧なプロの演技を見せていました。彼女は集中的に役の準備を進め、トレーニングで１２キロも体重を落としていたのです。
死の５週間前、マリリンはコスモポリタンという雑誌の打ち合わせでカメラマンのジョージ・バリスに「今が一番幸せな時なのに、この先はどうなるのかしら。待ちきれないわ」と語っていました。

警察の報告によれば、８月４日から５日にかけての夜、モンローは何度も電話をかけているそうです。ホワイトハウスにかけたのか、それとも司法省か、定かではありません。自殺説はどちらにしても有力ではありません。
マリリンの同僚、マーロン・ブランドはこう言いました。「あれほど成功していて、名声、若さ、お金、美しさ、そのすべてを手にしている女性がなぜ自殺なんかするんだ？誰にも理解できないよ」

ハリウッドスターのあいだでは一般的であった刺激物や鎮静剤にマリリンも長い間頼っていました。そしてあまり考えもせずに医者のことを信じたり、ちゃんと処方箋に従って薬を飲むことも怠っていたようです。死の何日か前の７月２５日、精神科医から処方箋を受け取り、強力なナンブタルではなく弱めの睡眠薬抱水クロラールを飲むように言われていました。しかし彼女の内科医はナンブタルを処方し、１９６２年８月３日までそれを受け取っていました。両方とも中毒性があり、神経系と生活機能を止めてしまう作用がありました。薬品はゆっくりと血液中で分解するため、マリリンの体はだいぶ前から侵されていたことになります。今日の専門家達は、潜行性の薬中毒は人間にまずショックを与え、コーマから呼吸停止に至るという考えに同意しています。しかし、彼女の死はやはり謎に包まれたままなのです。

彼女は常に、落ち着くことの無い気ままな生活を送ってきました。死のほんの数ヶ月前にカリフォルニア州ブレントウッド、ロサンゼルスの１２３０５フィフスヘレナドライブ、に７７，５００ドルで初めて自分の家を買いました。

３回の離婚と３回の流産を経験、そして薬と酒に溺れた３６歳のとき、マリリンは次のように書き残しています。「私は、映画界のセックスディーラーにお金儲けをさせるような変人じゃなくて、私自身でありたいの。ハリウッドでは、キスに１，０００ドルも払ってくれるけど、人間性には５０セントしか払わない。女の道徳的美徳よりも髪型の方がずっと重要なの」

彼女は１９５０年代の最も有名な女優でありましたが、一番の支払いを受けていたわけではありません。バーバラ・スタンウィックやエリザベス・テイラーの方がもっとお金を稼いでいました。マリリン・モンローはいくつかの受賞経験もあり、ゴールデン・グローブも３度受賞しました。さらに８個の他の賞をもらい、６回ノミネートされています。１９６９年２月８日、ロサンゼルスのハリウッドブルバード６７７８番地のウォーク・オブ・フェイムに星型プレートも載りました。

コレクションの持ち主および貸主のテッド・スタンファー

テッド・スタンファーは、アメリカの伝説の映画俳優と言われるマリリン・モンローとロック・ハドソンの思い出の品や個人の持ち物の数々を個人的に所有しているドイツの専門コレクター、貸主、学芸員であります。

１０歳のとき、ハリウッドの有名人モンローに興味を抱き始めました。１９９０年代初めごろから、彼女の映画に興味があったのですが、もっと個人的なこと、彼女の神話、そしてニューヨークでの生活に注目するようになりました。
ニューヨークで開かれた一番初めのそして最も有名なモンローのプライベートの品々を扱ったクリスティーズオークションでは、特に映画スターの暮らしの中の私物を手に入れることに専念することにしました。彼が購入するときは、すべて一流のオークション、映画スタジオの保管所、そして評判の良いコレクターからと決めています。

そのうちにテッド・スタンファーのコレクションは、５つの分野に分かれました。衣類、アクセサリーと合同展示物、スタジオで撮影されたオリジナルの古い写真、記事、映画小道具などです。一番集中的に集めたのは、マリリン･モンローの代表作『お熱いのがお好き』で使われた２２０点以上の品々です。ほとんどは、ビリー・ワイルダー監督が個人的に保管していたオリジナルアイテムです。モンロー思い出の品々に加えて、テッド･スタンファーは、アメリカの俳優、ロック･ハドソンの個人的な持ち物も集めました。二人のハリウッドスターが同時期に活躍していたので、合同の展示も行います。７００点以上のアイテムを個人で揃え、この種のコレクションとしては世界最大と言えます。

多大なコレクションの数と世界中で絶えることのないマリリン・モンローの人気によって、テッド・スタンファーが美術館やギャラリーで行われる特別展示の許可を与えることのできる人物であることを決定的としました。もっと多くのアイテムを収集したいと思い、色々な関係者にも今まで公表したことのない品々を展示するチャンスを与えてきました。学芸員として、仲間からユニークなアイテムを借りたり、協力を仰ぎ、また概念を理解する手助けをしたりもします。技術的な問題に対してアドバイスもできます。

テッド・スタンファーは専門家であり、個人で所有するコレクションを一般に公開する数少ないコレクターでもあります。展示品を通して、モンローのユニークな性格や歴史上に無比の存在感を残した才能ある女優の姿を紹介するだけではなく、むしろ個人的に照らし出された部分、知られざる姿を見せようとしています。名声の裏側で、一般人として希望と固い意志を持った頭の良いビジネスウーマンてあったという情報を提供しています。

テッド・スタンファーは、マリリン・モンローの個人的所有物であった日常アイテム、重要な撮影に着用したお気に入りのドレス、そして仮面の裏の姿がわかる記録などを公開します。すべてのアイテ

ムはモンローに適切な敬意を示し、疑わしくそしてスキャンダラスなアメリカの報道からは距離を置いて、テッド・スタンファーによって公開されます。

彼のコレクションのひとつひとつは、ヨーロッパ、中国、アメリカで数々の展示会、プレビュー、ショールームで展示されてきました。現在の目標は、この展示を皮切りにヨーロッパの選ばれたミュージアムにおいて同じような形式で継続的に展示を行っていくことです。この度の展示会には、クリスティン・クロガル、クリスティン・シュルツ、メイト・ミンゲス・リカルト、エスター・サークル、ダニエル・アンバーグらのコレクションも加えられています。

テッド・スタンファーは、パートナー、ジャーナリスト、情報会社、世界中のコレクターたちと連絡を取り合っています。そしてマリリン・モンローの親戚やロック・ハドソンの遺言執行人とも直接連絡を取っています。しかし、モンローの熱狂的ファンとはしっかり距離を置いています。

テッド・スタンファーは、マーケティング及びコミュニケーション/プレゼンテーションに焦点を当てて経営学を学びました。いくつかの工業会社で長年働き、財政、経理部門の部長を務めました。
１７歳の頃、仕事とは別に美術品の展示会で働いた経験があります。２００９年から自信のマリリン・モンローコレクションの展示を継続しています。２０１２年初め、自分の会社を設立し、展示会開催、貸し出し、購入、売却など全てを扱っています。現行の展示会は、２０１５年までヨーロッパ各地を巡回して開催されます。同時に、本の執筆もいくつか進めています。

ワークショップとコンテスト

マリリン・モンローは、映画『紳士は金髪がお好き』で『Diamonds Are a Girl's Best Friend』 を歌っています。ワークショップでは、皆の忘れることの出来ない、そして類まれなアーティストをもっと好きになってもらいます。専門家の指導のもと、６歳以下の子供たちは誰でも木製のマリリンの文字のパズルに飾り付けをすることができます。ビーズ、ガラスの石、金のリボンなど何でも使って、マリリン・モンローの歌に出てくるダイヤモンドのように輝かせてください。記念に作品を持ち帰ることができます。参加費は無料です。マリリンのパズルと材料は。すべてトーイ・ワールド・ミュージアムでご用意します。申し込みは不要ですが、参加者多数の場合は、少しお待ちいただくこともありますのでご了承ください。

展示会では、２つのコンテストが行われます。”Looking for Marilyn Kenner”では、マリリンに関する知識を深めることができます。ちょっとした技能を使って、展示会会場またはホームページで正しい答えを見つけてみてください。
２つ目のコンテストは、あらゆる年代の方にクリエイティブな才能が求められます。Marilin の７つの木製の文字で芸術性を表現してください。すべてのエントリー作品は、トーイ・ワールド・ミュー今うの入り口に２０１３年１２月２１日から２０１４年１月５日まで一般公開されます。皆さんに好きな作品を選んで投票していただきます。

入館のご案内

開館時間

ミュージアム、ショップ及びレストラン

毎日 10:00 – 18:00

スイス・アッパーライン・ミュージアム・パスがご利用いただけます

入館料

CHF 7.00 /5.00

１６歳以下のお子様は大人の方と一緒なら無料で入館できます

特別展示は追加料金をお支払いいただかなくてご覧になれます

館内は車椅子で移動できます

Media Contact

メディアの方のご連絡先

ご質問等は、以下へお問い合わせください。

Laura Sinanovitch

Director / Curator

Toy worlds Museum Basel

Steinenvorstadt 1

CH-4051 Basel

Telephone +41 (0) 61 225 95 95

sina@swm-basel.ch

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Background information / pictures online at :

www.toy-worlds-museum-basle.ch

Media, Passwort: swmb

参考資料/写真は以下のサイトでご覧になれます：

www.toy-worlds-museum-basle.ch

メディア、パスワード: swmb

Filmography

The films without titles translated into German were not released in German cinemas or on television. Marilyn Monroe's voice was regularly dubbed into German by Margot Leonard.

1947 Dangerous Years – Directed by: Arthur Pierson

1948 Scudda Hoo! Scudda Hay! – Directed by: F. Hugh Herbert

1948 Ladies of the Chorus – Directed by: Phil Karlson

1949 Love Happy – Directed by: David Miller

1950 A Ticket to Tomahawk – Directed by: Richard Sale

1950 The Asphalt Jungle – Directed by: John Huston

1950 Right Cross – Directed by: John Sturges

1950 The Fireball – Directed by: Tay Garnett

1950 All About Eve – Directed by: Joseph L. Mankiewicz

1951 Home Town Story – Directed by: Arthur Pierson

1951 As Young as You Feel – Directed by: Harmon Jones

1951 Love Nest – Directed by: Joseph M. Newman

1951 Let's Make It Legal – Directed by: Richard Sale

1952 Don't Bother to Knock – Directed by: Roy Ward Baker

1952 Clash by Night – Directed by: Fritz Lang

1952 We're Not Married – Directed by: Edmund Goulding

1952 Monkey Business – Directed by: Howard Hawks

1952 O. Henry's Full House – Directed by: Henry Koster

1953 Niagara – Directed by: Henry Hathaway

1953 Gentlemen Prefer Blondes – Directed by: Howard Hawks

1953 How to Marry a Millionaire – Directed by: Jean Negulesco

1954 River of No Return – Directed by: Otto Preminger

1954 There's No Business Like Show Business – Directed by: Walter Lang

1955 The Seven Year Itch – Directed by: Billy Wilder

1956 Bus Stop – Directed by: Joshua Logan

1957 The Prince and the Showgirl – Directed by: Laurence Olivier

1959 Some Like It Hot – Directed by: Billy Wilder

1960 Let's Make Love – Directed by: George Cukor

1961 The Misfits – Directed by: John Huston

1962 Something's Got to Give (unfinished) – Directed by: George Cukor

Awards

1951 Golden Globe Henrietta Award for the most promising personality of the year

1952 Photoplay Award: Special Award

1952 Magazine “Look”: Personality of the Year 1952

1953 Golden Globe Henrietta Award: World Film Favourite – Female

1953 Photoplay Award for the fastest rising star of 1952

1953 Redbook Award for Best Young Box Office Personality

1954 Photoplay Award for Best Actress in “Gentlemen Prefer Blondes” and “How to Marry a Millionaire”?

1956 BAFTA Film Award – Nomination for Best Foreign Actress in “The Seven Year Itch”

1956 Golden Globe – Nomination for Best Actress in (Comedy or Musical) for “Bus Stop”

1958 BAFTA Film Award – Nomination for Best Foreign Actress in “The Prince and the Showgirl”

1958 David di Donatello (Italy) for Best Foreign Actress in “The Prince and the Showgirl”

1959 Crystal Star Award (France) for “The Prince and the Showgirl”

1960 Golden Globe Award for Best Actress (Comedy or Musical) for “Some Like It Hot”

1962 Golden Globe Award for Female World Film Favourite

Short Biography Marilyn Monroe

1926	Marilyn Monroe is born Norma Jeane Mortenson on 1 June in Los Angeles. She is placed in foster care on 13 June.
1933	She goes back to her mother.
1935	Her mother suffers a nervous breakdown and is admitted to a mental hospital.
1935 – 1937	She is placed in an orphanage in Los Angeles and then moves in with an aunt.
1942	Marriage to James Dougherty – a marriage of convenience to avoid having to return to the orphanage.
1942 – 1945	She works as an assembly line worker, spray painter and photo model. First photographed by David Conover.
1945	Her first photographs appear in the U.S. Army magazine “Yank, the Army Weekly”.
1946	She gets her first film contract with 20th Century Fox and takes the stage name Marilyn Monroe. Divorces James Dougherty.
1947	First movie experience is as an extra in “The Shocking Miss Pilgrim”. First movie role is in the film “Dangerous Years”.
1947 – 1962	She stars in a total of 31 films.
1948	She signs a six-month contract with Columbia Pictures. Her first mentor is Johnny Hyde, vice-president of the William Morris Agency, who helps her get additional film roles.
1949	The photographer Tom Kelley photographs the famous calendar page: Marilyn Monroe on Red Velvet.
1951	20th Century Fox re-sign her on a seven-year contract. By the end of the year she receives 2,000 to 3,000 fan letters a week.
1952	She gets to know baseball star Joe DiMaggio. Her first real starring breakthrough role is in the film “Niagara”. On her birthday, she receives a major role in “Gentlemen Prefer Blondes”, which she finishes in the following year.
1954	She marries Joe DiMaggio. In February she performs in Korea for thousands of U.S. soldiers deployed there. Separating from Joe DiMaggio in the autumn of the same year. She moves to Manhattan, founds a production company with photographer Milton Greene, Marilyn Monroe Productions, Inc. She starts acting classes with Lee Strasberg at the Actors Studio.
1955	Officially divorces Joe DiMaggio. The film “The Seven Year Itch” premiers with the famous film scene on the subway grating.
1956	Marriage to Arthur Miller. Filming of “Bus Stop” and then “The Prince and the Showgirl” for Marilyn’s own film production company. Filming begins in England where she meets Queen Elisabeth II.
1959	She shoots her successful movie “Some Like It Hot” and in the following year receives the Golden Globe Award for Best Actress.

1960 In Nevada she stars in her last completed film “The Misfits”, the screenplay was written by husband Arthur Miller. Her film role is too close to her real life.

1961 Arthur Miller and Marilyn Monroe divorce. She is in regular contact with her ex-husband and friend Joe DiMaggio.

1962 March: She gets her second Golden Globe Award, this time for the most popular actress in the world, presented by Rock Hudson.

May: She performs on 19 May at the birthday party of John F. Kennedy and sings her famous “Happy Birthday” at Madison Square Garden, New York, in front of 17,000 Democrats.

June: 20th Century Fox announce a new contract.

End of June: three-day photo shoot for “Vogue”, with celebrity photographer Bert Stern, later known as the “Last Sitting”. However, there were some more photo shoots with other photographers.

The end of July / beginning of August: Marilyn negotiates a new contract with 20th Century Fox, who promise her a higher salary and more rights. The interrupted filming of “Something’s Got to Give” continues.
Marilyn Monroe and Joe DiMaggio decide to remarry on 8 August.

On 5 August Marilyn Monroe is found dead in bed at her home in Brentwood, Los Angeles.

8 August, the day her wedding was planned, she is carried to her grave; despite the police and doctors doubting she has committed “suicide”.

Quotes of Marilyn Monroe

“I knew I belonged to the public and to the world. Not because I was talented or even beautiful, but because I had never belonged to anything or anyone else.”

“I’m going to be a great movie star some day.”

“I’m not interested in money, I just want to be wonderful.”

“The body is meant to be seen, not all covered up.”

“I’ve been on a calendar, but never on time.”

“I have too many fantasies to be a housewife. I guess I am a fantasy.”

“An actress is not a machine, but they treat you like a machine. A money machine.”

“Being a sex symbol is a heavy load to carry, especially when one is tired, hurt and bewildered.”

“I don’t know who invented high heels, but all women owe him a lot.”

“If I had observed all the rules, I’d never have gotten anywhere.”

“A wise girl kisses but doesn’t love, listens but doesn’t believe, and leaves before she is left.”

“What do I wear in bed? Why, Chanel No. 5, of course.”

“Sex is a part of nature. I go along with nature.”

“After all, if I can’t be myself, who can I be I would like to know.”

“A career is wonderful, but you can’t curl up with it on a cold night.”

“I don’t mind living in a man’s world as long as I can be a woman in it.”